

東日本大震災災害対策NEWS

◇東日本の仲間とともにがんばろう◇

〒336-8512 埼玉県さいたま市南区鹿手袋 6-18-12 Tel.048-863-6211 Fax048-837-1989



床下の土砂撤去作業に奮闘（右・吉田書記）

◇行程

日時：4月18日（月）～4月22日（金）

行き先：岩手県大船渡市三陸町越喜来

活動地域：大船渡市内

活動内容：

床上浸水をした家屋の清掃や床下に入った土砂のかき出し、救援物資の整理
庭先や家屋周りの土砂のかき出し
道路や空き地のゴミ拾い、写真の復元作業（主に女性）

参加：吉田・栗木

『必要な物資が必要な市民に届いていない』

ボランティア先発隊の報告

【栗木常任中執記】三月十一日に発生した大地震・津波・原発事故は死者・行方不明者二万七千人を超え、約十八万人が避難所生活を強いられるという未曾有の被害をもたらしています。この状況を受け、全労連では震災直後から加盟組合・団体諸団体と力を合わせ、被災地の地方労連・諸団体と連絡を取

り、被害の実態把握と支援、政府への緊急申し入れ等に取り組んできましたが、現地の支援を強化するため、全労連内に「全国災対連共同支援センター」を設置するとともに、全国の仲間呼びかけ、宮城、福島、岩手でのボランティア派遣をはじめました。受け入れは四月四日からはじまり（福島・岩手は四月七日から）、岩手では四月二十一日時点で七三名が名簿に名前を連ねており、支援の輪が確実に広がっていることを実感しました。



仲間から寄せられた物資（ボックスティッシュ、四百個、タオル四百本、マスク千九百五十枚）を持って、福島県双葉町の住民が避難している旧騎西高校へ二二日に、中山書記次長と田中技術研修センター事務局長と訪問しました。

旧騎西高校には、いわきナンバーの車が旧校庭を埋め、マスクも、加須市・双葉町自治体職員や物資を運ぶ業者が右往左往している状況でした。多くの避難してきた住民と校内ですれ違いましたが、疲労困憊で、慣れない避難生活の不安、厳しさなどが顔色から感じました。

旧騎西高校へ避難している双葉町へ救援物資を届ける

物資は体育館へ運ぶよう指示を受け、ボランティアの方々を手伝っていただき、物資を運びましたが、広い体育館は、全国から寄せられた物資で埋め尽くされていました。物資運搬後、校舎内に臨時で設置されている双葉役場へ行き、

双葉建設組合の組合員で双葉町町議会の議長である清川泰弘さんへ面会の申し込みをしました。初対面にもかかわらず、議長の清川さんは、教室に設置された応接室へ案内してくれ、そこで懇談しました。

清川さんは、マスクも報道などの対応の苦慮、いつ目途がつかかわからない原発問題、住民を受け入れてくれた埼玉県への感謝など、「このお礼は必ず返したい」と述べられていました。十九日に訪問した福島県連から安否確認のための掲示物（組合、中建国保加入のみなさんは加入組織へ連絡してください）を渡し、何か要望があれば言ってほしい旨を伝えました。

とにかく先行きが不透明な状況に対し、不安が渦巻いているのがとても印象に残りました。一日も早い帰宅への展望が開けることを願うばかりです。

【本部・島野記】

*震災による現場での影響、情報、仲間の奮闘を支部、本部へおよせください。なお、写真があればメールで送ってください。よろしくお願ひします。 y_shimano@saitama-doken.or.jp

◇一日目

朝九時三〇分に湯島にある「全労連会館」に集合し、「もっこり竹の子交通」のバスに乗り込み午前十時に出発。二時間ごとの休憩を取りながら、一路岩手県へ。東北海道は那須のSAを超えてから、地震の影響で道が悪くなり始める。また路肩での工事も増えてくる。宮城に入ると地割れをしている部分が極端に多くなり、バスも減速をしながらの運転となる。SAには、自衛隊の車両や晃に復興支援に向かう工事車両が増えてくる。午後七時過ぎ、ようやくあづま荘に到着。あたりはまっくらで津波で被害を受けた町の状況は確認できず。その日は夕食をとって就寝。全労連から本日到着したメンバーは十名。



◇二日目

朝七時三〇分から朝食をとって、八時三〇分に宿泊先を出発。今回のボランティア活動の流れは、まず参加者全員で大船渡市が開設している「大船渡市災害ボランティアセンター」に毎日登録をして、その職員の指示に従って作業に従事することになる。ボランティアセンターを主に運営しているのは大船渡市の社会福祉協議会である。まず、受付に行き、名前や住所、連絡先といったパーソナルデータを書き込む。すると、名前を書き込めるシールをもらい腕にはめる。次に市内のどこかに派遣をされ作業に従事することになるが、全労連で参加しているメンバーは多少かたまって派遣をされる。私をふくめ五名でおこなった活動は、床上浸水をした家の下の床下に溜まった土砂の撤去およびダメになった畳の運び出しとなった。ちょうどこの日は雨が降っており、庭に運び出されていた畳の運搬は、びしょ濡れになりながらの作業となった。また床下の土砂の撤去は、まず床板を掃がしての作業で、床板をはがし切れない部分は、床下に潜って土砂をはき出すという過酷なものになった。また土砂を取り終えた後は、消石灰を散布して消毒・におい消しをするのが定番となっている。お昼は一度宿に戻って昼食を取り、午後は再度同じ作業を行う。すべて終えボランティアセンターに戻ったのが午後四時頃。

◇三日目

昨日同様、午前八時三〇分に出発しボランティアセンターへ。本日の作業は一二名で比較的津波の被害が少なかった地域の家屋の清掃作業に向かう。以前旅館を営んでいたらしく非常に大きな建物だったが、幸い床下浸水でずんだった土砂のかき出しと、庭先にあつてダメになった植木や段ボールの運び出し。また道路反対側に建てられた倉庫の中にある古いテレビや食器棚、その他もろもろの運び出しをおこなう。この作業は午前中で終了。昨日はお昼に宿に戻って昼食をとったが、弁当を持たされており、それをボランティアセンターの駐車場で食べる。午後には、床上浸水をした独居老人宅の庭先の土砂の撤去をおこなう。午前中と違い庭先には二センチ程度の土砂が溜まり既に固まっている。それを角スコでそぎ取るように撤去し土嚢袋に詰めていくのだが、固まっている上に石もごろごろしており思うようにとれない。しかもどこまでが土砂でどこからが土なのかもよくわからなく、結局、土嚢袋は五十袋近くになった。それを道路まで運ぶ作業がまたつらい。午後二時半頃センターに戻るとまだ戻っていないメンバーがいるため、短時間でできる作業を希望すると、センターそばの道路のゴミ拾いをおこなうことになる。そこら中に木片が落ちていたため、袋はすぐに一杯になり両手に抱えきれないほどになる。それを道路の脇に運びこの日は終了。

◇四日目

本日は総勢で二人の参加となったため、五組に分かれて作業することになった。私たちは四名でセンターから三〇分ほどのところにある日頃市（ひころいち）中学校の体育館に集められた物資の仕分けに従事することになった。その体育館は主に衣類が集められており、体育館は衣類の入った段ボールで覆い尽くされていた。ほかにも、米が集められている場所（七十トン近くあると聞いた）など市内に五、六カ所ぐらいあると説明された。衣類は、おおざっぱに下着、冬物、男物、女物など仕分けされておいてあるが、それを一個一個開封し、さらに細かく分類（長袖シャツ、半袖シャツ、パンツ・・・）し、さらにサイズごとに分けて段ボールにしまうという作業となった。一番感じたのは、作業効率の悪さだ。あらかじめ仕分けされた段ボールが開封した品物をより分けて入れていけばいいのに、段ボールがないため一回全部出して、そのあいた段ボールに「長袖シャツ」など書いてそこにまた入れていくということになる。そこには阪神・淡路大震災や新潟中越沖地震の教訓が何も生かされておらず、非常に残念に感じた。ともかく空き段ボールを作り、S、L、長袖、半袖、股引、パンツなど開いた箱に書いてそれを並べて効率よく作業を進められるようつとめた。また地元の若い青年ボランティアは、「ここにこんなにあるのに全然必要な市民に届いていない。誰かそういうシステムを考えてくれればいいのにな」ともいっていました。そういうところでも国や行政が率先して避難民の声を聞き、機敏に対応することが必要だと感じた。この作業は三時三〇分で終了しセンターへ戻り、全員揃ったところで宿泊所へ帰宅。

◇五日目

この日は帰宅日なので、引き続き作業に従事する仲間を見送った後、午前9時に東京に向けて出発した。途中、仙台で宮城班を拾い、午後6時には東京に到着した。

◇感想

ボランティアに参加をしてくる方々の想いは一緒だが、受ける側、被災者側の想いは、こちらが想像するほど単純なものではなく、被災者一人ひとりが複雑な思いで受け入れているんだということを強く感じました。被災された多くの方々は、過去を受けとめながら現実を元気に前向きに生き、そしてものように暮らせる未来を望んでいます。そんな想いに寄り添い活動することがボランティア活動なんだらうと思えました。